

# 青山サロン みんなで俳句をつくりましょう！



短歌・川柳・詩も OK

ハイクだより NO.4

2023年2月28日

## 季語は最大公約数の五感情報のかたまり

季語にはひとつの単語「春」「ひまわり」「虫」もあれば、短文的なもの「春めく」「行く秋」もあり、「文化の日」「クリスマス」の祝日そのまま季語になっているものもある。例えば、夏の季語「風薫る」は、若葉や青葉を吹き渡る印象から、肌を感じる風（触覚）、吹かれる若葉青葉の様子（視覚）、におい（臭覚）も刺激される。「風薫る5月」は初夏の明るい空や鯉のぼりを想像する人もいる。季語「風薫る」は、5音のみで多くの人たちの脳裏に共通のイメージを伝えます。季語は五感情報のかたまりなのです。俳句は短いので、季語のこの力を使って、読者の心に映像や音やにおいを再現します。

夏井いつき先生のことばから

俳句を知ると人生が変わる！

## 俳句こそ人生だ！

- 俳句で脳トレ！老けない脳に。
- 俳句で人生が楽しくなる！  
頭もよくなる！
- 俳句で脳が若返る！  
認知症も防げる！



俳句・短歌・川柳を新聞や雑誌などから紹介します。俳人や歌人以外は苗字のみです。

俳句のしくみ

- ① 五七五の十七音
- ② 季語が入る(季節を表す魔法の言葉。)
- ③ 切れ字がある(や かな けり)

- ◆ 反り癖の箒をなだめ落葉掃く……行本
- ◆ 小春日や足湯に足を預けおり……川上
- ◆ 鳶鳴くや冬菜がすし育ち過ぎ……志葉
- ◆ 初夢を語る笑顔の老一人……児玉
- ◆ 野生馬の無心に食ぶる冬岬……中津
- ◆ 居間という特等席や冬夕焼け……篠木
- ◆ 年賀状生存通知のごとくなる……小川
- ◆ 冬うらら足湯に並ぶ膝小僧……畠山
- ◆ 大寒や出勤の空星冴えて……中林
- ◆ 初湯殿猫に乳房を見られけり……伊東
- ◆ 同棲や石路の花から徒歩の分……板柿
- ◆ 立冬の真つ赤な夕日大きくて……垣内
- ◆ 新春の願いはひとつ恋したい……前野
- ◆ 賀状来たまだ生きているこのお方……母熊
- ◆ 独りゆえ雑煮拵え独り食う……萩原
- ◆ 柚子七個浮かせ一人の長湯かな……佐藤
- ◆ 元氣かと互いに問ふも年賀状……谷口
- ◆ ゆく年のあれこれ七味唐辛子……長友
- ◆ 蕾けふ色みせくれし冬椿……山口
- ◆ 餅を搗く帰れぬ孫の顔浮かべ……名賀真
- ◆ 日の力もらいて作業春隣……山本
- ◆ 四口はや列なして出る集醒車……野元

短歌のしくみ

- ① 五七五七七の三十一音
- ② 季語はいらない。

- 冬空にタツチするまじりにジャンプして  
高い竿に干す水色のシーツ……堀
- 再発はなしと結果の出たその日  
友の訃報に夕餉が曇る……金丸
- 何をしてもいつちやがいつちやが言うつ母に  
生きる力を植えつけられる……谷口
- 空の青のどけき光白い月  
ふるさとの野に琵琶咲きて冬……外尾
- 里帰りの娘と過ごした四日間  
夢だったのかと日記帳を繰る……馬場
- 野線も日付も気にせず思うまま  
私は書こう今年の手帳……伊藤
- 三人が今や一人のおでん鍋  
母のはんぺん妻のつみれや……藤田
- 巨大なソーラーパネルのごとく建つ  
大根やぐらは光る欲しがる……倉永
- 金入れるレシート取れと言うレジに  
慌てる時代遅れの我がいて……成相
- 冬の朝草一面に霜が降り  
眩く光る朝の一時……酒井
- 故郷の椎葉で育つ柚子の濃さ  
捨ててなるかと皮まで喰らう……松岡
- 12月8日の悪夢の再現か  
敬基地たたく閣議決定……山本

川柳のしくみ

- ① 五七五の十七音
- ② 季語はいらない。

- ★ おもてなし裏だけだった五輪かな……南亭骨太
- ★ マスク顔むかし不審者いま正義……やまぼつし
- ★ 年金で食えず働く高齢者……山本
- ★ 年金生活値上げラッシュで音を上げる……小笠原
- ★ 落語聞き一人で笑つお正月……岡本
- ★ マフソンを寝転んで見るニガ日……森
- ★ 昔軍部いま米軍の言うがまま……高科
- ★ 武器よりも子どもに金をかける時……大和
- ★ ラーメンの汁を飲み干す妻の留守……高橋
- ★ 電気代こわこわ開ける請求書……本間
- ★ マイナンバーそのうちチップ埋められそ……不美子
- ★ 戦争をやつてる場合か気候危機……粕川
- ★ 山際さん「経済より記憶再生」先でしょう……芦
- ★ 車検では試してみないエアバック……田村
- ★ アポなしと思えぬポツンと一軒家……福岡
- ★ また値上げ節約生活もう値上げ……サラ川
- ★ 料理番組試してみたい技を知る……清水
- ★ 飲み会でマスクはずして知るお顔……サラ川
- ★ 通販のおせちが奪う母の味……西村
- ★ 待ち時間スマホがあれば大丈夫……大田原
- ★ 横文字が増えて紅白遠くなる……宮崎
- ★ 老男はなくて老女はある不思議……今賀
- ★ 添え書きの一言嬉し年賀状……河野
- ★ 北風ご向かつて季ズンパン紙……新名

## 青山公民館の玄関「青山サロン ポスト」

早速の投句ありがとうございます。みなさんから  
の投稿をお待ちしています。俳号(お名前)もお  
忘れなく！！



## 渥美清と俳句③ 森英介『風天 渥美清のうた』文春文庫より

渥美の句友でもあるイラストレーターの和田誠から「無名の若い人たちとも句会をやっていたから探せばまだほかにも風天俳句がある」と言われ、渥美の参加した「トリの会」「たまごの会」から 29 句、そしてまた 9 句見つかった。

渥美の句友でイラストレーターの灘本唯人は「渥美さんはうちの句会では俳句が終わったあと仲間と一緒にビールを飲んで楽しそうでした。業種が違う気安さから、午前 1 時ごろまで話し込んで盛り上がっていました。若いころの浅草時代や結核療養所時代の話はしていましたが、映画の話は一切しなかったと思います。どこを歩いても注目され、サイン攻めにあう普段の生活にはよほど窮屈な思いをしていたんでしょうね。私は芸能界とは無縁だし、上下関係も何も無い気楽な身分でした。そんな空気の中で、みんなからただの友人として扱われる渥美さんは居心地がよかったですよね。そのあと渥美さんは一切お酒を飲まないと聞きましたがどうしても信じられませんでした」

渥美清はどのように句会を楽しんでいたのか。「アエラ句会」の穴吹史士は「渥美さんの句はナチュラルな句境だった。技巧を凝らすわけではなく、自然の情感を詠って余韻がある。そんな句が多かった」。句会のメンバーの一人だった東京・銀座のバーのママ戸板順子は「渥美さんはお酒もお弁当も一切手を付けなかった。身体にはとても気を付けていたみたいですね。私たちが一番楽しみにしていたのは、披講のときの渥美さんの朗読の声。音吐朗々というのはあのことで、みんな惚れ惚れと聞きました。風天さんにとって句会はひそかな心の楽しみの場所だったのでは？ご病気をもちの中自分で律しながら潔さのようなものがあつた。とてもいい時間を共有させていただいて今でもうれしく思います」と振り返った。

(つづく)

青山の作品

コーナー

その③



※七十歳を期に創作を二十余年、九十一歳を前にした平成二七(2021)年に句集『徒然に』をまとめました。 山崎 静子

◆若き日の旅の写真のことおつく

◆それぞれの旅の思い出アルバムに

◆つれづれに旅の写真を紐解きて

今亡き人のほほえみており



◆初春や

孫の肩抱き

幸せを

◆大正琴

辞めて久し

い師に出会

い

◆苦勞して集めし田畑どうなるの

◆堤防にツバナを抜きて遊びし日

※一月初旬、仕事始めにて

宏阿秋豊

◆小寒 子等の奮闘とどけ黄泉よみに

※スイートコー

ンの芽の出を確認して 宏阿秋豊

◆息白じびる

めぐりて緩む頬

※強風にて被膜ビールが舞いだすのを見て 宏阿秋豊

◆ビール舞う



人飛びはぬる木枯らしめ

※令和五年正月の歌。老いると夢も多いが食欲になり句にまとめられない。お許しを。寒いので畑に出る前に庭を見ながら句づくりを励む。 川崎 年治

◆老いた両掌指からもれる白い息

◆世の平和家族の健康村人の幸祈り

◆冬の雨豊作といえ身にしみる

◆梅の小枝めじろが逃げるモズの声

◆幼い時オヤツねりくりイリ」餅今スイ

ーツ

※冬のめろ口で一句

青山 二休

◆亡き母の笑顔を忘れず桜かな

◆寒いなか野菜定植春早く来い

◆園児たち粉雪舞う日持久走

※寒い冬口で一句

好々猫

◆木枯らしよ吹くならついでに連れて

けコロナ

◆世の中は換気換気とうるさいけれど

我が家はもともとすき間風

◆野良仕事会話も風にかき消され

◆登園車たのこ白い息かけてアンパンマン

◆午前十一時そろそろ風神お出ましに

※冬の年中行事で一句

念弘

◆高齢化野焼き田人たんどもままならぬ